

## 小・中学校国語科書写における基礎的研究

―望ましい筆記具の持ち方指導における

今日的課題と指導法について―

神野 雄 二

### 一 はじめに

本稿は、書写書道教育に関して国語科書写教育の基礎基本の視点に立った在り方を、実態調査を通して考察するものである。中でも、小・中学校での望ましい筆記具の持ち方指導における今日的課題と指導法について検討してみたい。筆者はかつてこれまで執筆した書写書道教育に関する論文また関係資料を纏めた。

まず本テーマに関する学習指導要領の関係箇所を抄録する。

小学校学習指導要領 第2章 第1節 国語 第3 指導計画の作成と内容の取扱い2 第2の各学年の内容の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕については、次のとおり取り扱うものとする。(2)「硬筆を使用する書写の指導は各学年で行い、毛筆を使用する書写の指導は第3学年以上の各学年で行うこと。また、毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導し、文字を正しく整えて書くことができるようにするとともに、各学年年間30単位時間程度を配当すること。」と明記されている。

また、第2 各学年の目標及び内容〔第1学年及び第2学年〕 内容〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕(1) ウ 文字に関する事項(2)に、次のようにある。

書写に関する次の事項について指導する。

ア 姿勢や筆記具の持ち方を正しくし、文字の形に注意しながら、丁寧に書くこと。

イ 点画の長短や方向、接し方や交わり方などに注意して、筆順に従って文字を正しく書くこと。

また、中学校国語科書写における指導は、以下のようである。  
中学校学習指導要領 第2章 第1節 国語 第3 指導計画の作成と内容の取扱い

(2)〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の(2)に示す事項については、次のとおり取り扱うこと。

ア 文字を正しく整えて速く書くことができるようにするとともに、書写の能力を学習や生活に役立てる態度を育てるよう配慮すること。

イ 硬筆及び毛筆を使用する書写の指導は各学年で行い、毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うようにすること。

ウ 書写の指導に配当する授業時数は、第1学年及び第2学年では年間20単位時間程度、第3学年では年間10単位時間程度とすること。

### 二 筆記具の持ち方に関する先行研究

筆記具の持ち方に関する先行研究における、主たる基礎資料・文献を挙げる。

○鈴木慶子著『文字を手書きさせる教育―「書写」に何ができるのか』（東信堂、二〇一五年八月）

○酒井直美「書字の姿勢・用具の持ち方に関する研究(2)」（『書写書道教育研究』第八号、全国大学書写書道教育学会、一九九四年三月）

○酒井直美「書字の姿勢に関する考察(1)」（『書写書道教育の探求 久米公先生御退官記念論集』、一九九六年二月）

○小野瀬雅人「幼児・児童における筆記具の持ち方と手先の巧緻性の関係」（『鳴門教育大学紀要』（教育学編）第十一巻、鳴門教育大学、一九九六年三月）

○杉崎哲子「書写用具の多様化に対応した執筆法指導のあり方に関する考察」（『書写書道教育研究』第一六号、全国大学書写書道教育学会、二〇〇二年三月）

○押木秀樹・近藤聖子・橋本 愛「望ましい筆記具の持ち方とその合理性および検証方法について」（『書写書道教育研究』第一七号、全国大学書写書道教育学会、二〇〇三年三月）

○小林比出代「左利き者の望ましい硬筆筆記具の持ち方に関する文献的考察

—書写教育の見地から—（『書写書道教育研究』第二〇号、全国大学書写書道教育学会、二〇〇六年三月）

○齋木久美・橋本浩志「中学生の書字姿勢および筆記具の持ち方の適正化を目指す研究—カーボン紙法の導入による筆圧を意識させる取り組みを通して—」（『書写書道教育研究』第二一号、全国大学書写書道教育学会、二〇〇七年三月）

○小林比出代「未就学児の硬筆筆記具の持ち方と書かれた点画の発達段階における変化」（『書写書道教育研究』第二五号、全国大学書写書道教育学会、二〇一一年三月）

○廣瀬裕之・橋本修左「硬筆書写における縦書きと横書きに関する研究—持ち方と文字の質や姿勢との関係—」（『書写書道教育研究』第二六号、全国大学書写書道教育学会、二〇一二年三月）

○杉崎哲子・滝本貢悦「硬筆書字における「持ち方」と「書き進め方」との相関性」（『書写書道教育研究』第二八号、全国大学書写書道教育学会、二〇一四年三月）

○清水文博「学校で使用された筆記具の歴史—筆記具の学習の見地から—」（『書写書道教育研究』第二九号、全国大学書写書道教育学会、二〇一五年三月）

○杉崎哲子「毛筆把持による硬筆の「持ち方」改善メカニズムの検討」（『書写書道教育研究』第二九号、全国大学書写書道教育学会、二〇一五年三月）

○杉崎哲子「左手書字における「持ち方」と「書き進め方」との相関性」（『書写書道教育研究』第三〇号、全国大学書写書道教育学会、二〇一六年三月）

○加藤達成監修『書写・書道教育史資料』（全三巻）（東京法令出版株式会社、一九八四年）

近三〇年における本題目に関わる主たる文献・資料を取り上げた。

酒井氏が、一九九四年に指摘した以下の提言は、その後ある程度漸進してはいるものの、これからの課題と言える。

大正期において、硬筆用具が一般に普及するようになり、硬筆書教授の研究、実践が盛んに行われるようになった。この硬筆用具が使用されるようになった初期の段階において、用具の持ち方については、英習字のテキストなどに示された欧米における硬筆用具の持ち方を受け継ぐと思われるものと、用具の性質などを考慮し、自己の経験などを基に考案したと思われるものなどが示された。しかし、それらの持ち方が何故よ

い持ち方なのかなどということについては、具体的且つ科学的に解明されていない。それは、現在においても同様である。このことは、書字の姿勢・用具の持ち方の指導が充分に行われてこなかった一因であり、更に、乱れの一因であるとも考えられる。

姿勢については、書写教育の立場からの科学的な研究は欠落しているが、医学的な立場や学校用家具研究の立場からは、それぞれ明治期から研究が行われてきている。これら、他の分野における研究の成果を、書写教育の立場から見直し、取り込んでいく必要があると考える。

今後は、このような考え方に立ち、現在よい（正しい）とされている書字の姿勢・用具の持ち方について見直し、具体的且つ科学的に姿勢・用具の持ち方について考えていきたい。（酒井直美「書字の姿勢・用具の持ち方に関する研究（2）」『書写書道教育研究』第八号、全国大学書写書道教育学会、一九九四年三月）

### 三 小学校国語科書写受講生へのアンケート調査と実態調査

平成二九年度における熊本大学書道受講者に対し、平成二九年四月、今後の書写教育の在り方を考えるべく、アンケート調査を実施した。調査の目的は、現在書道を受講する学生の書写に関する意識の在り方、また書写教育の教科内容の開拓と教材開発という、より広い視点から書写をどのように認識しているか、その実態の把握をめざすものである。また学生がどのように筆記具（毛筆・硬筆）を持っているかの実態調査を行った。ここでは、筆記具の持ち方の写真を撮影した（図1～6）。

調査の対象者は、熊本大学に在籍する二年生「国語A」受講者一〇二名である。調査場所は3B教室、調査時間は三〇分である。

質問は大きく三項目に分けアンケートを課したので分析・考察する。

問いは以下の通りである。

- 1、小学校国語科書写の指導における今日的課題は何だと考えるか、思うことを述べなさい。
- 2、「手書き文字」の課題と展望について、思うことを述べなさい。
- 3、小学校国語科書写における望ましい筆記用具の持ち方指導における今日

的課題と指導法について、思うことを述べなさい。

- ① 硬筆筆記具使用の場合
- ② 毛筆筆記具使用の場合

以下はその回答である。

### ○1に対する回答

- ・書写のねらいに、正しく、整えて、速く書く能力と、学習や生活に役立てる態度がある。指導者は学習内容を明確にし学習者の書写能力をいかに伸ばすかという考えが一般的であるが、目の前にいる児童、生徒を適切に見つめ伸ばすことが望まれる。よって学習者が書写の学力を社会生活に活かせること、すなわち、一人一人が文字を書くことに自信をもち適切かつ効果的に、気持ちよく書けるような指導をすることが課題である。
- ・小学校国語科書写の指導における今日的課題は「筆記具の持ち方」だと思う。現在の子どもは自分の字が嫌いという人が多いと思うので、その原因ともいえる、小学校の時期から持ち方の徹底をすべきだと思う。
- ・文字を書くことは、情報伝達の重要活動である。それだけでなく、すべての学習活動の基礎といえる。読みやすい字を適切な速さで書く能力を育てることが課題であると考ええる。
- ・かつての書写の指導は、手本を中心として、指導者の実技能力に頼ったものになりがちであった。今日はそのねらいを達成するため、学習内容をより明確にし、学習者の書写能力をいかに伸ばすかということが課題である。
- ・国語科書写の授業時間に手本を見て正しく整えて書くだけでなく、日常生活での書写力を定着させることが大切と思う。
- ・書写の専門講師が減っていることが、課題であると考ええる。書写から思考や想像力、言語感覚を養うことを目標としているため、書写の楽しさを知っている専門講師が担当した方が、子どもたちの関心をより高める指導ができると思う。

### ○2に対する回答

- ・現代において、ワードプロセッサの発達や、文字でのやりとりがネット・ワーク上で行うようになってきており、私たちは文字を手で書く機会が減少している。しかし、手書き文字では、コミュニケーションとしての機能

や、記憶、思考の効果など、手書きの方が大きい効果が期待できるものが多く存在する。そのため、書写の時間を通して、生徒に「書くこと」の学習を進めていくことが必要不可欠である。

- ・「手書き文字」は、すべての学習活動の基礎なので、読み易く、適切な速さで書く能力を見につけさせることが課題である。近年、コンピューターが定着し、文字がネットワークでやり取りされるようになり、今後手書き文字を使う機会がより減っていくと思われる。だが、日常的な礼状など、手書き文字を使うべき場面もあるので、しっかりと使い分けることが必要である。

- ・手書き文字の学習はすべての学習活動の基礎である。単に読めれば良いというわけではなく、適切な姿勢、持ち方で丁寧かつその状況にあった速さで書くことが課題である。またIT化が進んでいる中、手で書くことの意義を教えることも必要である。

- ・社会において自分の気持ちを表現する為に文字を使う機会というのは少なくはない。しかし現代はワープロを使って「手書きで文字を書く」こと自体が減っている。文字は個性を表し、誠意を表し、ぬくもりを与えるといった書写独特の特徴を伝えつつ、正しい持ち方、書き方の指導が必要となる。

### ○3の①に対する回答

- ・硬筆を正しく持たないと字のバランスや筆圧、疲れやすさなどにおいて様々なデメリットを有する。硬筆は使う機会が多い為、自分のくせがついてしまうと直りにくくなってしまっているので、なるべく早めに、まずは補助具（輪ゴム他）を使うなどして正しい持ち方の感覚を身につけさせる必要がある。また学校に限らず、家庭での指導の協力をあおぐのも大切になると思う。

- ・小学校一年生から正しい持ち方を指導し、習慣をつけるようにする。しかし私自身正しい持ち方でない児童への矯正はあまり必要ないのではないかと考える。それは、書きやすい持ち方の方が書くことが楽しく感じると思うため。



・私は小さい頃から箸の持ち方や鉛筆の持ち方について祖父母から指導を受けていた。そのため、正しい持ち方を身につけることができた。正しい筆記具の持ち方はきれいに見えるだけでなく、余分な力が入らず、疲労も少なくてすむ。子どもたちにどうして正しく持つことが望まれるのかを問い、実際にやってみることで、いつもと書き方に変化があるかどうか尋ねてみることが良いのではないかと思う。

### ○3の②に対する回答

・毛筆の持ち方は日本や中国の「文化」の一つであるためとても大切だと考える。やはり正しい持ち方が姿勢を正しくし、きれいな文字が書けることと供に、日本の伝統とその文化の美しさも子供に理解してもらいたい。DVDや書写のビデオで興味を持たせることから始めると良いと思う。

・筆の持ち方がよく分からずに、自分なりに書きやすい持ち方をしている子どもがいることが課題であると考え。単鉤法と双鉤法、二つの持ち方を教師が実演してみせ、持ち方のコツやポイントを分りやすく説明する指導が考えられる。

・毛筆は、学校の書写の授業で初めて触る子どもたちも多いだろう。初めて筆で文字を書くときに正しい持ち方をきっちり教え込み、その後も正しい持ち方をきっちり教え込んでいけば、正しい持ち方を続けていけると思う。だから、子どもたちに最初に教える時に、なんとなく教えるのではなく、きちんと正しく教えることが大切だろう。書写の時間には正しく筆を持つことを教えないといけないと思う。

・毛筆を使って文字を書く機会が少ないため、硬筆と持ち方を変えなければならぬ理由を理解できない児童・生徒も少なくないので、毛筆の特徴を伝え時間をかけながら、正しい持ち方を指導する必要があることが課題だと思う。

この調査により、学生の回答から、書写教育における毛筆使用の重要さや、そして文字を手書きすることへの関心の深さが読み取れる。学生は、書写教育に関する指導技術を身につけるとともに、それに対する教養や知識を養い

たいと考えている。確かに学生の論じた意見は、多分に印象的なものであるが、そこに記述された内容を総括してみると、学生の求める理想としての教師像が明瞭に浮かび上がっている。それは単なる書写に関する技術の伝授や、知識の受け売りではなく、的確な指導理念の確立と、より人間的な教師像である。

ただ、回答から見る限り受講生の教師への意識の実態の落差が大きく、指導者側としては、学習者の実態に応じた指導、並びに意識の向上を高めていくことが要求される。

近年、急速なOA化、コンピュータの活用等により、精神が疲労しており、より人間的で豊かな生活環境を求めている。書写教育に課せられた使命は大きいといえよう。

また学生への実態調査から、決して望ましい筆記具の持ち方がされていないことが分かった。「図1-6」として取り上げた通りである。今日の課題と指導法については、繰り返し、丁寧に、時間をかけて指導する以外方法はないと思われる。

## 四 中学校国語科書写受講生へのアンケート調査と実態調査

次に、熊本県立大学の書道受講生に対して筆記具の持ち方の写真を撮影するとともに、アンケートを課したので分析・考察する。

平成二九年度における熊本県立大学書道受講生に対し、平成二九年四月、今後の書写教育の在り方を考えるべく、アンケート調査を実施した。調査の目的は、前章三と同様、現在書道を受講する学生の書写に関する意識の在り方、また書写教育の教科内容の開拓と教材開発という、より広い視点から書写をどのように認識しているか、その実態の把握をめざすものである。学生がどのように筆記具（毛筆・硬筆）を持っているかの実態調査を行った。

調査の対象者は、熊本県立大学に在籍する二年生「書道」（実技）受講生一三名である。中学校教諭普通免許状（国語）の取得をめざしている。調査場所は第6講義室、調査時間は三〇分である。調査結果の集計・分析をしてみたい。

問いは以下の通りである。

書写教育の今後の在り方として大切だと思うことを述べよ。なかでも「望ましい筆記具の持ち方指導における今日的課題と指導法」について述べなさい。

## 回答

・今後の書写教育では、書写を単なる「文字の書き方の伝授」としてではなく「国語の力を伸ばす」授業として捉えることが重要だと考える。もちろん、書写教育において「正しく整った文字を書けるようになること」は大切なことだが、子供たちがその過程で「どう学ぶのか」という「学び」の意識に目を向けることも重要だ。特に毛筆などは日常生活で扱わないことが多いため、いかに関心興味を持たせるかということが求められる。「書写が何の役に立つのか」と疑問を抱いて抵抗感を持つ児童・生徒に対し、「自らの手で文字を書く」ことの大切さ、必要性を理解させなければならぬ。そのためには、まず学習者の学習要求を把握し、実態に伴った指導計画を立てることが必要だ。「活字離れ」と言われる現代だからこそ、自らの手で文字を書き、学ぶことが子供たちにとって大切なことであると思う。

・小学校に入学してすぐ、鉛筆のにぎり方やひらがなやカタカナの練習を国語のなかの書写の時間にした記憶がある。学年があがるにつれ漢字が増えていき、小学三、四年生の頃には毛筆書写を行った。私は、文字は一生生涯用いるもので、履歴書などを書くときに、その人の第一印象を与えるものだと感じている。だから、小学校低学年のうちから、書き順、字形などをしっかり指導し、整った文字を書かせる指導を行う必要があると考える。中学校になると、今まで親しんでいた楷書だけではなく、行書体も書く。そのため、行書と楷書の違いを理解させ、文字を書くこと、筆で文字を書くことの楽しさを学ばせることができる指導をしていくべきではないかと考える。高校生になると、芸術教科の一つとして書道が存在する。そのため、文字を整えて書くことも大事ではあるが、芸術として文字を書くこと、筆を扱い文字を書くことを楽しむことができるような指導を行っていくべきだと考える。このようなことから、書写教育は本来の目的である、字形を整えるなどの要素をふまえて、学年にそった書写教育を行うべきだと考える。

・私は、子どもの実態に即した授業展開のあり方が大切だと思う。小学校低学年の頃は、絵を描いたり、文字を書いたりする活動型の学習が好きであったはずなのに、学年が上がるにつれ、抵抗を示すようになる。ここに子どもに合わせた指導が行われていないのではという疑問がでてくる。おそらく、黙ってお手本通りに書きなさいというような指導が行われている可能性が低くはないのだろう。文字には個性が表れており一人一人の子どもの個性を尊重するような授業が望ましいと考える。もちろん前提として「ため、はね、はらい」のような基本事項を押さえた上での話である。

この調査から学生の多くは、書写教育に相当の関心を示し期待を寄せており、また卒業後も書写を学び続けたいと、その学習の必要性を感じていることが分かった。また、書写教育の今後の在り方が具体的に示されており、書写教育を探究する姿勢が窺われた。

筆記具の持ち方の実態調査では、略ぼ前章同様の結果が得られた。やはり、基礎・基本に徹した地道な指導が求められよう。

## 五 望ましい筆記具の持ち方指導における今日的課題と指導法について

これまで同テーマに関して、どのような研究が進められてきたか、筆記具の持ち方に関する先行研究の中で、興味ある研究を抽出する。

・本研究では、従前から説かれている「持ち方」と「書き進め方」との関係について、科学的データをもとに三指の働きを詳細に解明することができた。今回は、児童・生徒への時間を要する調査が困難であることから成人を対象に調査を行ったが、「持ち方」の指導は、将来的な持ち方が決定される入門期や低学年の時代において特に重要視されている。この成果を生かし発達段階を考慮しながら、筆記具の特性を加味した「持ち方」の再検討等の課題克服に向けて、今後も研究を進めたいと考えている。(杉崎哲子・滝本貢悦「硬筆書字における「持ち方」と「書き進め方」との相関性」、『書写道教育研究』第二八号、全国大学書写書道教育学会、二〇一四年三月)

・本研究では科学的データに基づいて毛筆把持による硬筆の持ち方好転の現

象について追求した。これが一方向の分析に過ぎないということは承知しているが、かつての実践研究の結果について追実験を加え、感覚的を可視化できたことと毛筆の特性について言及できたことが大きな成果だと考えている。これからのICT化の推進を見据え文字を手書きすることの重要性が問い直されている。そのために必要とされる科学的な根拠という視点は合理性の追求だけにあるのではなく、人が自身の感覚を再認することにも重要である。自身の感覚をとらえること、触感をつくる「テクニカル」の考え方が、人間らしい教育のあり方に結びついていくのではないかと考えている。(杉崎哲子「毛筆把持による硬筆の「持ち方」改善メカニズムの検討」、『書写書道教育研究』第二十九号、全国大学書写書道教育学会、二〇一五年三月)

・現代的な表現ではないが、持ち方の是正に関しては「矯正」という立場も必要となる。書字・書写というものが習慣的なものであるから、ある程度の強制力を持たせながら進めていかないと効果は見られないからである。方法的には、大きく次の3方法が用いられる。

- ①手指の動きから考える方法
- ②書写用具自体に変化をつける方法
- ③補助具を用いる方法

(中略) そのことを確実に押さえ、単なる形態的な指導に陥らないことが、「実技指導を行う実践能力の育成」への第一歩であろうと考える。「文字を書く」ということは、静止したフォームの良否ではなく、運動的な機能性に彩られたものである。(小竹光夫「実技指導を行う実践能力の育成(1)——硬筆書写用具の持ち方への取り組み——」、『実技教育研究』18、二〇〇四年一月)

近年同テーマに関して、科学的データに基づいて研究が進められてきているものの、まだその説明からはこれからといえよう。今後文字を書くことをさまざまな視点から考究していくことが重要である。関係諸分野との連携が求められよう。

次に過去において、望ましい筆記具の持ち方指導における今日的課題と指導法についてどのような内容が考えられてきたのだろうか。ここに二例を図版で取り上げる。江戸期・明治期刊行図書における筆記具の持ち方について

見てみたい(図7・8)。

#### 図7

【書名】『筆道稽古早学問二』【巻冊】全四冊二六丁【著者】笹山梅庵【成立】天保十一年版

#### 図8

【書名】『運筆自在書法要訣(全)』【巻冊】全一冊七六丁【著者】湯川梧窓【成立】明治四十二年十一月【発行所】青木嵩山堂

両著は、図版とともに丁寧な解説がなされており、同問題は、時代を問わず大切な内容を含んだものとの認識があり、それ相応の取り扱われかたをしてきたことが分かる。過去の研究成果を踏まえ、基礎研究を続けていくことが重要である。史的考察は今後の課題としたい。

## 六 おわりに

国語科書写教育の研究は、基礎論の概観・展望とともに、更なる実践研究の成果と蓄積が課題であろう。今後教材の研究を進め、それを具体的に書写教育に有効に活かすための教材開発を行うことが求められる。

これからはこれまでの狭い指導に囚われることなく、現状の改善を期して、魅力に富んだ教育を考える必要がある。そして生涯にわたって文字文化を重視し、さらに文字文化を創造していくことが大切であろう。

毛筆による書写教育の学習実践は、我が国の伝統的で豊かな言語文化を認識し、また文字文化を尊重し、親しんでいく態度を育成することが重要である。今まさに書写教育の創造的な営為が求められており、特に次世代を担う青少年の育成は急務といえる。

本稿で取り上げた「小・中学校国語科書写における基礎的研究——望ましい筆記具の持ち方指導における今日的課題と指導法について——」は、古くて新しい今日的課題であり、最も書写書道教育における基礎・基本となるテーマといえる。

教員養成における書写教育の在り方は、今後も幾度となく議論されるであろう。将来の書写教育の在り方を探り、その動向とこれからの課題のいくつかを指摘したく、教科教育の基礎研究として本稿を執筆した。

今回実施した学生への意識調査、実態把握は、大切な問題提起をしている。将来における学校教育は、生涯学習の基礎を培う場としてとらえ、位置づけ



られる必要がある。現在世界的な規模で教育改革が叫ばれるなか、書写書道教育の充実と発展のために、本稿の執筆を契機として、更に書写書道教育に関する研究を進めていきたい。

## 【注】

(1) 筆者は二〇一五年三月『書写書道教育論考』（創想舎）を刊行した。同著で、小・中学校国語科書写に関わる論文として次の通り掲載した。

### 第Ⅰ部 書写書道教育研究（学術論文）

・第四章 書写書道教育試論―生涯学習の視点に立った書写書道教育の在り方―

・第五章 書写書道教育に関する基礎的研究―仮名指導における字源の有効性について―

・第七章 書写書道教科書に関する基礎的研究―京都市学校歴史博物館の取り組みと所蔵品を中心に―

・第九章 書写書道教科書に関する基礎的研究―京都府立総合資料館の取り組みと所蔵品を中心に―

・第一章 今井凌雪先生における教育者としての功績―筑波大学での講義を中心として―

### 第Ⅱ部 書写書道教育研究（研究ノート）

・1、今井凌雪先生の書学書道史・書道教育―氷斎先生書話―

・3、書写書道教科書に関する基礎的研究―巻菱湖の『千字文』を使用している実践的研究―

・4、書写書道教科書に関する基礎的研究―日月斎所蔵習字手本一覽―

・5、東京学芸大学・筑波大学等で受講した講義録

(2) 新学習指導要領は、平成二九年三月告示された。

## 【主要参考文献】

- ・久米公著『書写書道教育要説』（菅原書房、一九八九年一月）
- ・富田富貴雄著『史的観点に基づく書写教育の研究』（大学教育出版、一九九六年六月）

- ・『書写書道教育研究』創刊号（第三一号、（全国大学書写書道教育学会、一九八七―二〇一七年）
- ・海後宗臣等編『日本教科書大系・近代編 第二七巻（習字）』（講談社、一九七八年十二月）
- ・井上敏夫編『国語教育史資料』『第二巻教科書史』（東京法令出版株式会社、一九八一年四月）
- ・『国語科教育学研究の成果と展望』（全国大学国語教育学会編著、明治図書、二〇〇二年六月）
- ・松本宏揮著『書法教育の実践』（私家版、二〇〇六年二月）
- ・平形精一編著『文字文化と書写書道教育』（菅原書房、二〇一一年三月）
- ・『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』（全国大学国語教育学会編著、学芸図書、二〇一三年三月）
- ・文部科学省『高等学校学習指導要領解説』芸術編（教育出版、二〇〇九年一月）
- ・『明解書写教育』（全国大学書写書道教育学会編、菅原書房、二〇一七年四月）



図4 硬筆の持ち方①  
(人差し指が親指を包み込んでいる)



図1 毛筆の持ち方①  
(親指が人差し指を包み込んでいる)



図5 硬筆の持ち方②  
(指に力が入り過ぎている)



図2 毛筆の持ち方②  
(指に力が入り過ぎている)



図6 硬筆の持ち方③  
(ボールペンを倒し過ぎている)



図3 毛筆の持ち方③ (小指が離れている)



図8 『運筆自在書法要訣 (全)』

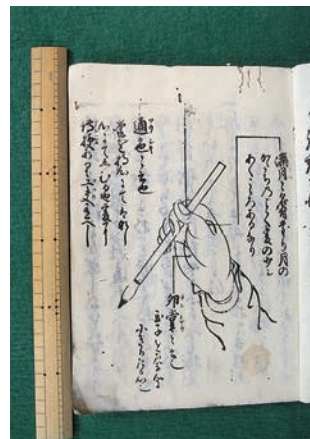


図7 『筆道稽古早学問二』